

「風の家」がある神戸市の六甲道駅北地区は、阪神・淡路大震災で約7割が全半壊し、焼失した。まちを復興するなかで公園ができることになり、その公園をどのようにするか、住民は話し合いを重ねた。公園内に「風の家」は建てられ、現在は住民のコミュニティ活動の拠点となっている。「風の家」づくりに中心的な役割を果たした佐藤厚子さんに話を聞いた。

# 焼け跡に建てられた「風の家」

阪神・淡路大震災で建物の約7割が全半壊し、焼失した六甲道駅北地区（神戸市灘区）には現在、広い「六甲風の郷公園」がある。六甲の地下水をくみ上げることができ、井戸や、果物がなる木が10種類あるが、公園の中心には集会所「風の家」が建っている。公園づくりに携わった佐藤厚子さんから「風の家」の中で話を聞いた。



阿知波龍矢 記者

終戦の年に生まれた佐藤さんは「この辺りは戦時中の空襲でも焼けなかった。古い家が密集していて、大震災のときに被害が大きくなった」という。焼け跡になった町には公園がつくられることになり、公園をどのようにするか、住民が話し合うことになった。住民の誰もが今まで経験のないことだったので、話し合いは簡単にはいかなかった。しかしみんなが協力をして、一生懸命考案、知恵を出し合った。そして7年あまりの月日をかけて公園の計画を立てて、震災発生から10年後、ついに公園ができた。そしていま、住民の想いがつまった「風の家」は、幅広い世代の人が遊べる公園のなかにあり、みんなが集まれる場所となっている。

# アイデアいっぱいの「風の家」



林卓杜 記者

「六甲風の郷公園」は、広い公園にしては遊具が少ない。しかし、遊具の代わりに防災設備が整っている。その中に建つ集会所「風の家」は木造だ。木の温かさで子どもからお年寄りまで気持ちよく使える。佐藤さんによると、公園をつくる時、普通なら「これもいる。あれもいる」というはずだが、「これはいらない。あれもいらない」とどんどん遊具がなくなっていくという。公園には、椅子がかまどになったり、トイレになったりと工夫がされている。井戸水を汲み上げるポンプもあった。災害時に水は貴重なのでよく考えられていると思った。非常時にはみんなが集まってこられる場所になる。風の家ではスレッチやヨガを楽しむ所だと、改めて思った。

地下30メートルから六甲の地下水をくみ上げ、川をつくっている。川にはポンプが設置されており、水遊びができるようになっている。



「安心コミュニティプラザ 風の家」木の温かみを感じられる木造の集会所。

一見普通のベンチに見えるが、座面部分を取るとかまどになったり、トイレになったり。被災体験にもとづき、公園内のいたるところに細やかな工夫がこらされている。



佐藤厚子さん 住民が一生懸命考案してつくった風の家は、連日多くの人に利用されている。

